

# チョウのひみつを調べよう

4月～7月(15時間)

## 1 はじめに

羽根学区には、国道248号線、電車通りなどの交通量の多い道路と大型ショッピングセンター等の商業施設や商店街、さらにシビックセンター、JR岡崎駅といった公共施設があり、決して自然に恵まれているとは言えない。学区を流れる川は一本もなく、田んぼや畑も数えるほどであるが、羽根大池をはじめいくつかの池、町ごとの小さな公園が点在し、校庭には季節ごとの昆虫や野鳥が訪れる。この学区に生きる子供たちに小さな命が毎年誕生していることに気付かせたい、そして残された自然を大切に思う気持ちを育てたいと考えた。理科学習と合わせて、昆虫(チョウ)を採取し、飼育するなかで自然の不思議さに触れ、小さな命を大切にする心情が育ってくれることを期待し、この活動を進めた。

## 2 実践の概要

### (1) チョウとの出会い

本校の東側には、ミカン、キンカン、ブンタンなどの柑橘系樹木が数本植えられている。5月、絵を描く会で自転車の絵を描いているとき、アゲハチョウがひらひらと飛んできて、ミカンの木に産卵した。子供たちが取り囲んでも逃げることなく卵を産みつけるアゲハチョウの様子を、子供たちはじっと観察した。モンシロチョウの飼育用に昨年度から育ててきたキャベツでも、その卵を見つけることができた。「育ててみたい」という思いを持ち、どちらかのチョウの飼育を進めることにした。

### (2) 飼育する中で

モンシロチョウは理科の教科書に詳しく載せられているが、一齢幼虫がかなり小さく、観察しにくいので、アゲハチョウを選ぶ子が多かった。卵も見つけやすかったのだが、孵化率が大変低く、



孵化し、殻を食べる1齢幼虫

黒くしわしわになって生まれぬままの卵がいくつもあった。5月15日の朝、採取してきた卵が子供たちの目の前で孵化を始めた。全員の子が生まれたての幼虫が出てきた卵の殻を食べるところを教材提示機を使ってライブで見ることができた。これをきっかけに、子供たちの飼育への意欲が増した。

子供たちは朝、学校に来ると、まず飼育ケースを観察し、フンを捨てたり食草を補充したりする世話をを行う。じっくりと観察カードを描くのは理科の時間に行い、毎日の変化に気付けるように小さな記録用紙を用意した。休み時間にもじっと飽きずに見る子もいれば、進んで世話のできない子もいる。新しい発見をした子は幼虫とともに写真を撮って記録するようにして、子供たちの意欲を持続させた。5月後半は運動会の練習と重なり世話の時間がじっくりと取れない中、1齢、2齢、3齢と大きくなる幼虫のためにせつせと練習帰りにミカンの葉を取ってくる子供たちの姿があった。

5月27日、孵化に続いて、サナギからアゲハチョウが羽化する瞬間に出会った。教材提示機のおかげで全員が大画面で見て、背中が割れるのではなく、頭の部分から抜け出てくること、生まれるとおしっこをすること、羽が伸びきり乾くまでしばらくじっとしている

ことをその目で確認することができた。名前を付け可愛がってきたアゲハチョウが空へ飛んでいく別れは、どの子も笑顔だった。無事に羽化した子は、アゲハチョウとともに写真を撮り、学級通信で紹介した。

幼虫に寄生蜂がつき無事に羽化できないこと、脱走してしまうこと、サナギの糸が切れて落ちてしまうことなど、壁も数多くあった。その都度一緒に図書資料、インターネットなどでより良い飼育方法や弱ってしまったときの対処法を調べ、なんとか助けようと四苦八苦しなながら飼育を進めていった。多くの子は自分のチョウを育てることに成功し、うまく育たなかった子には途中で教師の育てている幼虫を譲ったり新たに採取したりした。羽化に失敗して羽根がしわしわのまま飛び立てないアゲハチョウ、餌不足で死んでしまうなど、全員一人1匹を育て上げることは難しかった。



羽が伸び、子供の腕を上るアゲハチョウ

### (3) 様々なチョウを調べたい

次第にチョウの魅力に引き寄せられていった子供たちは、アゲハチョウ、モンシロチョウ以外のチョウに興味を持つようになった。「家のパンジーのプランターにいた」と黒くてと

きれいに羽を広げたツマグロヒョウモン



げとげした幼虫を持ってきた A 児。ツマグロヒョウモンの幼虫だった。6 月末で羽化まで育てられるか不安だったが教室で飼育することにした。学校の西側にあるクスノキには多くのアオスジアゲハが飛来していた。そこで、子供たちと一緒に幼虫を探してみたら、幼虫も卵も発見することができた。保健室登校をしている B 児に、保健室前のクスノキの葉を毎日教室に取ってくる役割を与えると、それが教室に来るきっかけになった。1 学期、本学級の教室にはモンシロチョウ、アゲハチョウ、ツマグロヒョウモン、アオスジアゲハの飼育ケースが並んでいた。初めは幼虫がこわくて触れなかった子も、毎日餌をやり、成長を見守るうちに、愛情をこめて世話をし続けることができた。

7 月、総合学習のまとめとして、飼育してきたチョウについて新聞にまとめることにした。調べたいこと、まとめたいことを尋ねると、飼育したチョウだけでなく、アオスジアゲハやその他のチョウについても調べてみたい、という意見が多く出された。テーマは自由にして、1 枚の新聞にまとめ、総合の発表会を行った。子供たちは、自分の観察記録や図書資料、インターネットなどを使い、楽しく新聞にまとめることができた。



「アゲハのてき」新聞

### 3 実践を振り返って

1 学期のチョウの飼育をきっかけに、チョウに興味を持った A 児は、夏休みの自由研究に「ツマグロヒョウモンの観察」を行った。母親も巻き込んで羽化の瞬間を DVD に撮影し、みんなにも見せてくれた。庭にミカンの木があることを知った C 児は、夏休みも家庭でアゲハチョウの飼育を続け、アゲハチョウの観察を生活作文に書いてきた。今後も、小さな命を大切に思い、様々な生き物がやってくる学校、学区であって欲しい。そのために学区の環境の変化や様子に関心を持ち、将来にわたって多くの生き物と共存できる自然環境のあり方を見つめていく子供の姿を願いたい。